

日清戦争開戦前夜の思想状況

— 金玉均暗殺事件をめぐる一考察 —

小林瑞乃

〔キーワード〕 日清戦争, 金玉均, 甲申政変, 福沢諭吉, 対外硬派

はじめに

1894年3月末, 日本に亡命していた朝鮮人政治家^{キムオクキョン}金玉均の暗殺事件が上海で起こった。金氏は明治維新をモデルに朝鮮近代化のため改革を目指し, 1881～84年に三度来日して福沢諭吉など日本の政治家と親交を結び, 朝鮮の守旧派から政権を奪取するため開化派が起こした甲申政変(1884年)の中心人物であった。この政変には, 明治政府の井上馨外務卿や福沢とその弟子井上角五郎, 民権派の後藤象二郎らが関係したといわれている。しかし, 政変が清の軍事的介入によって失敗すると, 日本に亡命した金氏らに対し政府は冷遇ともいえるべき扱いをした。日本政府にとっては, 朝鮮政府や清との関係上やっかいな存在となったのだといえよう。

そして, 亡命から約十年後のこの年, 金氏は上海に渡航し滞在中に朝鮮人^{ホンジョンウ}洪鍾宇によって暗殺されたのであった。金氏に接近した^{イイルジク}李逸植が清の李鴻章との会談を勧め, 上海行きを洪に同行させていた。彼等は朝鮮政府の密命を受けた刺客であり, 日本人の大三輪長兵衛や川久保常吉らも関与していた。その後, 金氏の遺骸は清の軍艦で朝鮮に運ばれ, 朝鮮政府によって極刑に処された。諸新聞はこの事件を大きく報じ, 対外硬派は政府を激しく批判し, 朝鮮政策が様々に論じられた。さらに東学党の蜂起により朝鮮問題, 対清関係は再び緊迫化し日清戦争が引き起こされた。このように金氏暗殺は, 日清戦争期の思想状況に無視できない重要な意味を



図1 「上海の兇行」(『時事』1894年4月8日)



図2 「金氏處刑の実況」(『時事』1894年4月24日)

持っているのである。

そこで本稿では、金氏暗殺をめぐる新聞論調に関する先行研究¹⁾の成果を踏まえ、さらに事件を契機にどのような世論が形成され、どのように開戦説得の論理が提起されたのかという問題を軸に、金氏をめぐる議論を日清戦争に至る思想状況の中に位置づけながら検証する。その際、暗殺事件をめぐる強調された日本人と金氏との「親交」の内実についても留意しつつ、特に金氏と関係の深かった福沢の『時事新報』（以下『時事』）を中心に諸新聞の議論を分析し、日清開戦を準備した言論界の対朝鮮政策および朝鮮認識を確認していきたい。

1. 遺骸引取りと埋葬運動

金氏が上海で暗殺されたことが伝わると、日本の新聞では次々と同情と哀悼の意が表された。稀代の俊才である金氏は、民間志士から政府中枢の政治家まで朝野を問わず交際は広かった。新聞各紙は一斉にその死を惜しみ、例えば『万朝報』は彼は「実に非凡の人物」「才子にして豪傑たるを得る者」「稀世の人物」だと述べ²⁾、「何事にも一頭地秀たる」「多智」「多才」「多意」「多情」で「大政治家が羨みても得る能はざる立派なる履歴」、「アア彼れをして時を得せしめなば」とその人物を高く評価しつつ非業の死を悼んだ³⁾。

その中で、日本人の「義挙」を強く訴えたのは改進黨系の『郵便報知新聞』（以下『報知』）であった。同紙3月30日の「金玉均氏暗殺せらる」は、「韓人未開にして、政争の当さに公明正大なるべきを知らず、妄りに凶器を弄して、政敵を除かんと欲す。豈に慨嘆に堪ゆ可んや」と暗殺を批判し、「人生の不幸は、志業未だ遂げずして、異邦に客死するより大なるはなし」と述べ、「日本党の首領」金氏が甲申政変に敗れ日本に亡命して以来「民間の義士仁人」「我が同胞兄弟」は十年にわたり「幾多の好意」をなしてきたと論じた。さらに3月31日の「同胞兄弟の義侠心に訴ふ」では、次のように金氏の日本に対する敬慕の深さを強調した。

「刺客の毒刃に斃れたる金玉均氏は、夙に日本の制度文物を敬慕し、朝鮮の弊政を革新せんと欲して、一敗地に塗れたるの士なり。其万死を遁れて、僅かに一生を得るや、直ちに日本に奔り来て、生死只だ我が同胞兄弟の義侠心に一任したり。氏が日本を敬慕するの深き、氏が我が同胞兄弟を信頼するの厚き、以て其一斑を伺うに足れり。」

そして、「親戚故旧皆な怨家の毒手に斃れ、天下の広きも、我が同胞兄弟を除ては、復た一人の親交なき」金氏のために日本人が最後の義挙としてやるべきは、「金氏の遺骸を上海より取寄せ、以て愛国者相応の礼容を備へて、之を氏が敬愛せる日本国土に埋葬する」ことであり、そのために「義金を捐醵して、金氏埋葬の資を助けよ」と訴えた⁴⁾。

「同胞兄弟」として金氏の希望をかなえるのだ、だから金氏の遺骸はどうしても日本に埋葬しなければならないと、さらに、次のように主張した。

「韓山の風雲を叱咤して、一たび平生の志業を遂げるは、金氏の最も希望せる所なり。不幸にして此志業を貫徹する能はずんば、聖代の逸民と為て、其敬愛せる日本国土に客死せんこと、亦氏が平生の希望なりし。（中略）不幸なる金氏をして、少なくとも其敬愛せる日本国土に永眠するを得せしめよ。遺骸を其憎悪せる清国に遺棄して、犬屍馬骨と與に政敵

しく恩威並び行ひ」「心服頼倚せしむべきのみ」だと主張した。政府の政策方針の誤まりが「尊大自持の清国をして飽まで韓廷の権柄を弄せしむるを致たせり」と難じ、欧米との条約改正だけでなく暗殺事件への対応も怠らないよう求めた。

『東京朝日新聞』（以下『朝日』）では、4月5日「刺客事件と国際談判」で、日本に生活する者は「生れの内国なると外国なるとを問はず」すべて日本の主権の下に保護されることが「治安を保持するの道」であり、事件への朝鮮国王の介在が事実なら「我国権を蔑視」したものとして国際談判を開かざるを得ないと論じた。また同紙の4月17日「後患を絶つべし」では、政府が「韓廷に向って切に諭告」し「厳しく措置」して「彼をして翻然として猛省開悟せしめんことを望まざる可らず」、「然らざれば後患或は絶つ可らざるなり」と主張した。

『時事』の4月19日「韓人の治安妨害」④も、各国領事の忠告を無視したこと、犯罪人洪鐘宇を重職にするという噂など、状況的には益々朝鮮政府に不審を抱かざるをえないと述べ、「彼の刺客等を一箇人と視做しても我政府が之に向て国内の秩序保安の職務を厳施」すべきであり、朝鮮政府には事件への関与疑惑を解くために「公然たる国際談判を開き」黒白をはっきりさせて「国家の治安を擁護」するよう強く求めた。

さらに、政府系の『東京日日新聞』（以下『日日』）も、事件当初より国家主権の侵害について問題視し、3月31日「金朴二氏の危難」では、次のように論じた。「文明の国家は無道の刺客を容れるざると共に亦私に不法の処分を之に加ふるを許さず」、「犯罪者は自他内外吏民に論なく之を罰し犯罪に至らざるも苟も危険に社会を與ふるものは其外人たるに於て断じて之を疆外に放逐する乃ち国家の要務たるのみ」、「帝国の法権は断じて公平中正を持し以て国家の秩序を保維せざるべからず」、事ここに至っては「如何なる情状あるに關せず其黒白を明にせざるべからざるもの亦政府の要務たり」と、刺客への法的処置と真相究明を求めた。さらに、「刺客の送遣」に朝鮮政府や清国の関与が明白となれば「一には故意に我邦土の秩序安寧を害する虞ある臣民を來朝」させたことをもって、「二には帝国の主権を侵して其私刑を擅にせんとしたる」ことをもって「断じて其政府を詰責して我満足を求めざるべからず」、と強硬姿勢で対応するよう要求した。

主権侵害について、『日日』は他紙以上に強硬な発言もあった。例えば4月11日の社説「刺客問題」では、国王が刺客に命じた物的証拠として「印璽」の真否が問題とされていたが、その「真贋」は問題でないとさえ述べ、朝鮮政府が刺客の「洪を優遇」もしくは「賞賛」し、また清国が「之に同意を表する」ようなことがあればそれ自体が問題であり、「主権侵犯の教唆者たる唯一の情況とすべからざるまでも」日本の「主権を蔑視」して兇状に及んだ「匪徒」に「同情」を表したことには「満足の説明を得ざるべからず」と主張し、「其情況は明に我が境土に來りて惡を為すの徒を喜ぶに傾」いており、「我主権を侵害せんと試るの匪徒を嗾使したるの罪を問ふに至ては亦其政府の清たり韓たるを論ずべからざるのみ」と述べ、事件に対応すべき閣僚の責任を強調した。主権侵害や秩序紊乱の責任追及を、日本政府に強く忠告していた。

と同時に、『日日』は、金氏をめぐる対応、特に遺骸引取り問題で日本政府を批判することには強く反対した。例えば4月15日社説「内外本末」は、遺骸引き取りの失敗は政府に責任はないのだから、「我当局官吏の失体」として「責罰」しようというのは「感情に趨るの弊」で

あり「内外の弁」を忘れたものだ」と批判し、同情はわかるが「金氏の霊を慰めるを精神として清韓及び我政府の処置を論ずる」ことには同意できないと述べ、国権の侵害を問う議論と金氏の霊を慰めることを混同すべきではないと強調した。「我主権を蔑如するの罪」は「国権を以て争ふものにして金氏の為に仇を復し若くは其霊を慰むるものならず」,「邦人の金氏の知友たるもの邦人たるの故を以て国権問題を天下に訴ふるは善し。金氏の知友たるが為に国権を論争するの謂れ將た安くに在る」という主張であった。

さらに同紙4月25日「内外本末」でも、金氏の不幸を嘆き八つ当たりで日本政府を攻撃するなど「人心の狂する一に此に至る乎」と述べ、金氏は渡航前に「帝国の保護を離る一言其謂れを帝国の政府友人に告ぐるあらず」,友人らに一言もなく日本を離れたのは「其意清国吏人に恃むに在り」,つまり「我政府保護を棄てたるに非ずして氏自ら棄つるのみ」,それなのに「其友人たるもの仇を帝国政府に復するの挙に出づ、甚しいかな其躁なるや」と難じた。これらは、金氏への同情を背景に反政府の論陣を展開していた対外硬派への批判であった。

こうして『日日』は金氏への同情と日本政府への批判を切り離そうとしたが、それは無意味であったと言えるほどに、日本政府による強硬政策の断行を求める声は高まっていった。

例えば、『時事』は4月13日「金玉均暗殺に付き清韓政府の処置」⑭で、刺客及び遺骸をめぐる清の対応について、犯罪人の本国引渡しは両国間の条約によるという説もあるが、清が「特に軍艦を以て護送の労を取」ったこと、さらに金氏の「身分は決して朝鮮人として取扱ふ可きものに非ざるにも関せず」,また「現に引取の請求人ありしにも拘はらず」,あえて朝鮮に送還したのは朝鮮政府の「歓心を買ふ」ためだろうと非難した。

こうした亡命者について、文明国では亡命した政治家を「本国にては手を下すこと能はざる」のが「万国公法の通例」である。しかし「朝鮮人の如き思想を以てすれば」,「日本人が其乱臣賊子に私して保護しつつあるものと認め年来無限の怨を抱きたることならん」と述べ、朝鮮政府の理解のなさを強調しつつ、「前年我政府が金玉均を小笠原島に流し又北海道に幽したるが如きも公法上には無益の沙汰」だが「其人の身を苦しめ聊か以て朝鮮人の情を和せんとするの小策にてありしことならん」と述べ、日本政府の金氏への冷遇は朝鮮政府の歓心を得ようとする意味のない方策だと論じた。

さらに同論説は、遺骸が極刑にもなれば「彼国人は更に其感情を新にしますます怨を深ふする」だろうし、「双方の感情」はますますこじれ「永久和親の交際」も覚束なくなるだろう、何とか「工風」して「彼国人をして無法の思想を改めしむるこそ適當の処置」だと論じ、まず「穩に理由を説き聞せて其悔悟を促す」べきだが、もしも「悟らざるに於ては一刀両断、力を以て悔悟の実を成さしめ以て一段落を告ぐるの外なかる可し」と断じた。

さらに、4月26日社説「一刀両断、事の結末を告ぐ可し」では、「今度の謀殺事件は我隣友なる朝鮮人が日本国に対して」礼を失したものであり、「我政府の当局者は此際断然の処置に出で今後の患を絶て両国の交誼を長ふするの手段を施さざる可らず」と主張した。密書の真偽を問い、実際に「教唆」していないとの確答を得たならば洪鐘宇は勿論関係者は「悉く嚴罰に処して今後永久假令ひ一人たりとも日本の治安を妨げんと企つるもの」がないよう保証させることが「我治安の爲めにも両国の和親の爲めにも必要の処置」だと主張し、朝鮮政府が「此要

求」に従わねば最早「和親交際の望」はない。「断然条約破棄を宣言する外に手段ある可らず」。その間居留民保護のため「我兵力を以て之を保護する」も「止むを得ざるの手段」である。どちらにせよ「一刀両断の処置に出でて事の結果を告げんこと我輩の敢て政府に望む所なり」と、果断な処置の実行を政府に強く要求した。

3. 感情を一掃すべし

他方、この事件を契機にこれまでの対朝鮮政策そのものが問われ、政策失敗の帰結としての現状を厳しく批判する声が高まっていた。その失敗の焦点は、強固な反日感情と清への依存を許していることであった。

例えば『朝日』は、事件直後から朝鮮の反日意識を問題視し、3月31日社説「韓廷非日本主義の増長」で、「非日本主義の増長」が「一朝一夕」ではないこと、その主な原因として防穀令事件での公使大石正巳の強硬談判への「悪感情」、「新貨幣事業の失敗」、東学党の反乱は「日本人の煽動」だという誤認、「日本人は凡そ大院君党と見做し居る事」、「日本に在る凡ての朝鮮亡命の徒は何れも日本政府にて擁護し居ると誤認せる事」、「近時日本公使の対韓政略柔軟なるより之を軽侮するの念生じたる事」などを挙げ、「要するに朝鮮は日本に対して今や十分の敵意を抱き来れり。到底好意を以て相對する望なし。此際に当りて日本の執るべき対韓政略は唯だ強硬の一あるのみ」と主張していた。『朝日』は、朝鮮人の反日感情が長年の衝突の繰り返しによるものであり既に変えようがないとして、日本政府に強硬な政策を要求したのである。

同紙は、この事件による「非日本主義」のさらなる増長を懸念していた。4月17日社説「失墜又失墜」では、壬午軍乱、甲申政変など「事ある毎に」「劣敗」し「不利益」となっており、今回も「遺骸は受取る能はず他の拉し去る所」で「唾然たるのみ」である。亡命者が国外に出れば保護義務はないとはいうが、それでは「始ありて終なき事」となって「俠国の名譽に顧て豈忸怩たらざるを得んや」と述べ、この結果「韓廷に於る非日本主義」は甚だ増長し、それに比して「清国の対韓勢力」はさらに増長する。「我所謂文明的政治家は其れ何を以て李翁の笑を免かれんとする乎」と政府の対韓政策のまずさを非難した。

こうした主張の『朝日』と同様に反日感情の根深さや政府の方針を批判した『時事』は、さらに政府の失錯とその挽回策として強硬な手段を要求した。4月27日社説「感情を一掃す可し」では、甲申政変失敗以後日本の対朝鮮政略は「一変」して「彼我の関係」は「旧時の如くならず」、「両国の交際」は「表面の儀式上のみ」で「隣交唇齒の情なく彼人民の我国を視ること啻に冷淡のみか寧ろ仇の如しと云ふも過言に非ず」と深刻化する悪感情を指摘し、「一大英断を施して其感情を一掃」しなければ「円滑の交際」は到底望めない、今回の事件で「いよいよ決断の必要を見るが如し」と主張した。敵対的な反日感情は一掃されねばならないが、「理を以て論ず」のは既に無理な状況である。というのも、「衝突の源は感情」であり、「衝突に衝突を重ねて最早や解く可らざるの極点に達した」のであり、今となっては「力を以て其感情を一掃せしむるの外手段ある可らず」と、「力」による解決への「決断」を求めるのであった。

同社説は、さらに治安上の不安や危険を強調し、ここで決断しなければ「双方の感情」はこ

じれ、ついに「不慮の事態」さえ生じかねないと主張した。予測される事態とは、次のようなものであった。まず、今回の一件で暗殺の成功を見た朝鮮の「壮士輩」は、成功して帰国すれば「重賞」を得るか「忠臣の名を博するに足る可し」として「いかでか奮激せざるを得ん」。こうして「続々日本に渡来して謀る所ある」のは勿論、こうした輩は平生より日本に「不快の感情を懐く者共」なので「更に一転して如何なる事を演ずるやも知る可らず」。「我国の治安の為めにも容易ならざる次第」である。他方、「日本人民も決して無感情の人民に非ず」、「殊に血気の壮年輩は感情一偏に制せられ「いよいよ堪へ難き場合に至るときは如何なる手段に出づるやも知る可らず」。「大坂国事犯の事件」も「十七年の変乱後、我対韓政略の変化に不満を懐きたるの結果」であり「前鑑遠きに非ず」と強調し、こんな事態とならぬよう「一刀切解して両国年来の感情を除き以て他日の禍根を断んこと」を当局者に「勧告」と論じた。大阪事件⁷⁾は民権運動急進派が朝鮮に武力介入して清の勢力を排除し開化派支援を企図した事件であり、『時事』が取り上げているのは興味深い、ここでは当局の危機感を煽るには絶好の前例として挙げたのであろう。

ともあれ、両国間の感情のもつれから生じ得る日本人と朝鮮人の衝突など危険な事態を強調しつつ、治安上の対策としても「力」による解決の必要を要求していた。こうした『時事』の主張は、多くの声を代弁するものであった⁸⁾。

ついに、7月24日社説「支那朝鮮両国に向て直に戦を開く可し」で、同紙は朝鮮人の脳裡にしみ込んだ支那崇拜の迷夢を覚破するには弾丸硝薬に勝るものなしと断じ、「世界文明の局面に於て大利益」であると開戦を主張したのである。

4. 文明と野蛮

さて、金氏の遺体は切断の上さらしものにされ、この遺骸の極刑をめぐっては諸外国の忠告を無視した行為だとして、各紙で激しい非難が起った。例えば、『日日』の4月18日社説「金氏の惨刑」は、「韓廷が都ての忠言を容れず斯かる所業に及びたるは亦是非もなき次第ながら

●遺骸の極刑



図3 『時事新報』 1894年4月20日

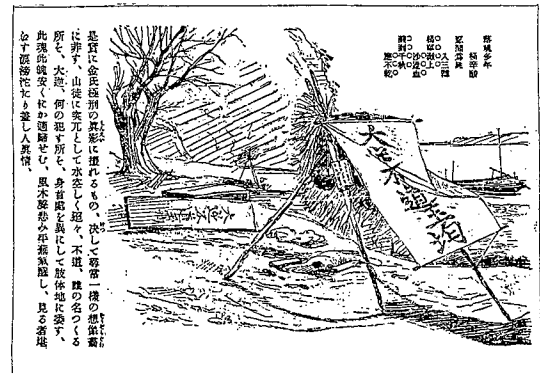


図4 『郵便報知新聞』 1894年5月5日

朝鮮の野蛮も亦甚しと謂ふべし」と論じた。また、『朝日』は4月18日社説「金氏遺骸の極刑」で、次のように激しく批判していた。

「吾公使善隣の友誼上特に其厚意を致したるに何らの斟酌もなく斯の如き無残至極の行為に出て覘然顧みざるもの、野蛮国の常として視れば別段怪しむに足らざるべしとはいへ、其善隣の道を思はず吾厚意を蔑如するの太甚しき誰か之を見て切齒扼腕せざるものあらんや、噫金氏死後の刑戮固に悲むべし、韓廷残忍の行為実に惡むべし、而して韓廷に此極刑を断行して憚らざるの意思を幫助せしめたるもの他に之あらんとの説を信なりとすれば尤も是惡むべきなり」

こうして、日本や各国公使からの忠告を無視し、死屍寸断という「残酷な所為」がなされたのは善隣の道に反すると厳しく難じ、清国の介在を示唆して反感を隠さなかった。さらに、『朝日』の4月20日社説「何を以て彼の文化を進めん」では、今回の事件は「朝鮮の半開なる、其一举一動総て所謂朝鮮的なる」ことを「暴露」したるものであり、一連の処置そのものが朝鮮の野蛮さの顕れであるとして、次のように強く批判した。

「国事犯と常事犯との區別を弁ぜざる如きは深く怪しむを要せず、唯その政敵たるを知るのみ所謂反逆の臣なるを思ふのみ、之を殺戮せんとして為めに與国の秩序安寧を障害するを憚らず、共犯者の通れて公使館に入るや之が引渡に猶予逡巡して而して漸く之を終るや急遽奇異なる挙動を演じて公使は立去りぬ、総て是所謂朝鮮的なるものにして寧ろ憫むに勝へたり。而して彼の殺人罪に酬ゆるに重責を以てし死屍を待つに慘酷無残の形戮を以てして而かも與国の忠告を容れざりしに至りては実に世界目觀の前に無類の蛮劇を演じたるものなり」

朝鮮は野蛮だ、だから文明化が必要だと、文明化の意義が強調されていた。さらに同社説は、「蛮夷を教導し蒙昧を開発し未開の民を補育して文化の徳沢に浴せしむるは先進邦国の任務」にして「名誉」であると述べ、特に日本と朝鮮とは歴史的に深い関係があり「朝鮮の我に於ける、境の相接し交の常に深き又他に其比を見ざるなり」と論じた。過去には日本が「進運」を助けられたこともある、その信義を全うするためにも、日本が「文化洽ねからず蒙昧野蛮の俗ある」朝鮮を「教導開発」するのは「善隣の交誼」であり「任務を全うするもの」だと主張した。先進国日本の任務は「東洋立国」のためと強調され、次のように「東洋の恥辱」を教戒する文明化の任務は、「東洋の運命」という文脈からも正当化されていた。

「嗚呼何を以てか彼の文化を進めん。頑冥此の如きは亦実に東洋の恥辱なり。之を啓発し之を教戒するは啻に人生普通の任務なるのみならず、抑々東洋立国の為めに欠く可らざるなり。其固陋を戒しめ其智識を開発し文化を鷄林七道に洽ねからしむるに非ずんば、其れ遂に彼の将来を如何せん。又実に我東洋の運命を如何せん。而して之が誘掖教導の任に當るもの其れ我日本帝国にあらずして何ぞ、豈力めざる可けんや」

他方『報知』は、『朝日』と同様の論理で、日本による清の文明化を主張していた。4月29日社説「日清の交誼」は、凶行を賞揚するような挙動は「野蛮の陋風」であり朝鮮と変わりはないとし、日本が「修好国」に対し「面目を保維」し「善隣の好誼」を尽そうとすれば「清国の措置を不問に措くこと能はず」と主張した。さらに、「東洋列国に対する文明の先進国として、

人類進歩の大法の爲めに、道義を扶植し、秩序を擁護し、比隣諸国をして、皆能く野蛮の陋風を去りて、文明の徳化に就かしめんと欲せば、亦固より其措置を不問に措くこと能はず」と論じ、清の挙動が極めて「事理」「人情」に戻ることを「厳責」し「将来を戒めて」、「善隣の好誼を尽くし」「文明の通義に服従せしめんことを力めざるべからず」と主張した。もし謝罪し悔悛しなければ共に「善隣の交誼を修め」「文明の化育を賛襄する」意思はないのだから、「対等善隣の交誼を絶ち、唯野蛮未開の劣等国」として処遇する他は無いと強調した。ここで主張されているのも、野蛮と文明、善隣の交誼ゆえの文明化という論理であった。

こうした論調をより簡潔に断言したのが、『時事』の「文野の戦争」論だといえよう。7月29日「日清の戦争は文野の戦争なり」⑨に先立つ同月22日社説「日本の文学一変せん歟」では、日清の開戦は「文明と野蛮との間の戦争」であり「東洋進化の爲めには実に関ヶ原の一戦」であると強調した。「朝鮮は申すに及ばず十八省四百余州に文明の新空気を吹入れて百千年来堆積したる汚塵を一掃するは我日本の天職なり」、文明は必ず野蛮に勝ち「大に国民の自覚(ナショナルコンシアスネス)を発起することとなり」、日本にとっては「前代未聞の一大快事」であると主張した。さらに総括的に論じたものが、8月8日「日本人の天職」であった(図5参照)。

さらに同紙7月27日社説「外国新聞紙及朝鮮事件」では、日本の朝鮮への行為は英国の埃及への行為と同じ正当なものであり、「東洋の一国たる日本は其隣の東洋国朝鮮に西洋文明を拡張せんと企て」「兵力に依ても己の信ずる所を強行せんと覚悟せり」と述べ、「人間進歩の物語中に全く前代未聞の壮観」にして「斬新」なことであると論じた。『時事』は国内のみならず国外の反応もよく掴んでいた。文明の論理は、列強の干渉を牽制するためにも主張するべき理念だったのであろう⁹⁾。

文明と野蛮の対置、野蛮国の教導、さらに文明化を担う東洋先進国日本の責務について、既に大きな総意が形成されていた。反日感情の一掃のための果斷の処置、「力」による朝鮮政略の断行は、文明化という更なる至上目的のために遂行されるのだと喧伝された¹⁰⁾。

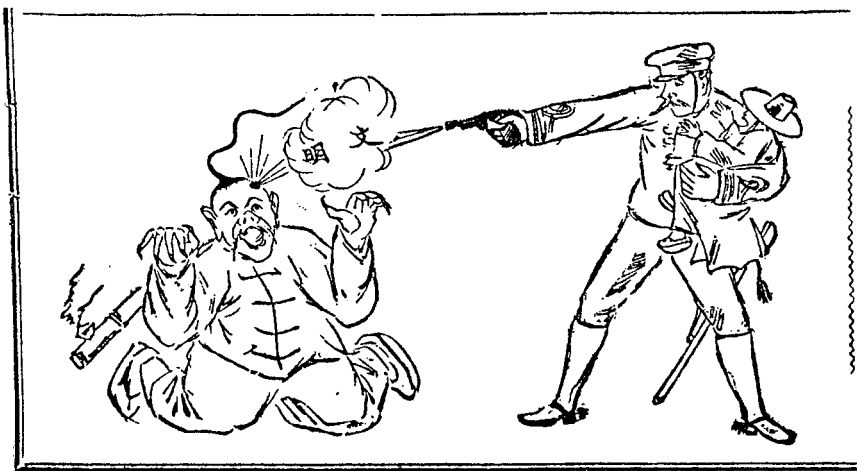


図5 『時事新報』(1894年8月8日)掲載の挿絵

5. 日本人の「義侠」

先述のように遺骸は引き取れなかったのだが、埋葬運動は遂行され、5月20日、金氏の葬儀が盛大に行われた。『時事』5月22日「故金玉均氏の葬儀」によれば、会葬者は近衛公爵・谷子爵・三浦安等の貴族院議員、尾崎行雄・犬養毅・大井憲太郎・井上角五郎等の衆議院議員を始め千有余名で、その他通行の道すがらはどこも見物人で溢れた（図6参照）。また、浅草本願寺の葬儀では、自由党や改進黨の有志代表者、新聞代表志賀重昂、親友総代小林勝民らが弔辞を読み、葬儀の後、青山墓地に遺髪外数品が埋葬された。「喪主の同国人柳赫魯李充実両氏は日本風の喪服を着用」していたという。

葬儀の翌日には、頭山満の門下生たちが、日清開戦を主張するために陸奥外務大臣と川上参謀次長を訪れていた¹¹⁾。また5月22日『読売』によれば、大阪事件の関係者の「大阪旧友会懇親会」が開かれ、大井憲太郎氏等50余名が集まり「新旧を談じ今昔の感に堪へず悲愴慷慨時事を談」じ頗る盛会で、記念碑設立を決定したという。

葬儀を挙行了たということ、それ自体が世論に与えた影響も無視はできない。『万朝報』5月22日「日本における金玉均氏の葬儀」では、「同じく一金玉均の死なり、朝鮮に在ては身首八道に晒され日本に在ては此盛儀を受く浮世なり」と述べ、極刑に処した朝鮮政府との扱いの違いが強調されていた。同紙ではこの他、「日本魂^{やまとだまし}の男児が会葬さるるを見て」詠まれた「倒れたる朝鮮垣を起す義気」などの柄井川柳の吊句も掲載された。『報知』5月22日「故金玉均氏の葬儀」も、「我が日本帝国の義侠の士は氏の雄魂を慰するに此の盛儀を以てせり、金氏たる者亦た地下に瞑するを得ん乎」と論じた。少年雑誌『少年園』でも、1894年6月3日「故金玉均氏の葬儀」で「此盛儀ありて金氏の冤も聊か慰するに足らんか」と述べられていた。

死体寸断というニュースは衝撃的であり、朝鮮の野蛮の証明として強調されたため、日本での葬儀は日本人の義挙、野蛮さの対局にある行為として人々の同情に更に強く訴えることになったといえよう。

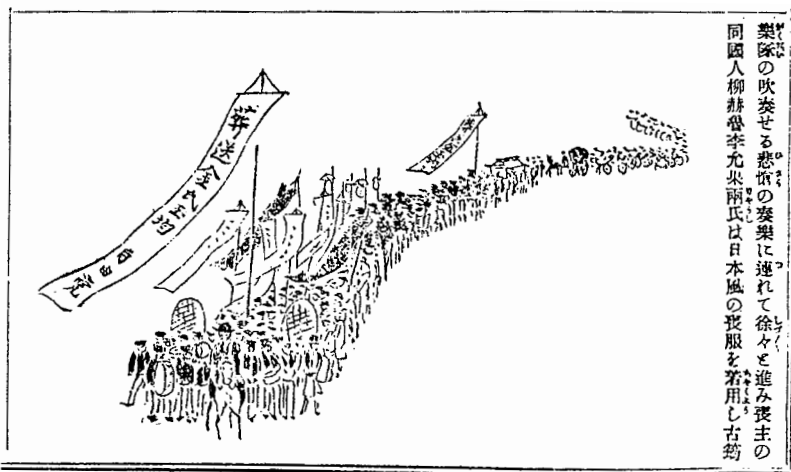


図6 『時事新報』1894年5月22日

さらに、新聞や雑誌には、金氏の死が日清戦争の導火線になったという主張が散見されるようになっていく。例えば『風俗画報』（臨時増刊84号、征清図絵第5編）1895年1月25日「征清の止むべからざる事」では、壬午軍乱、甲申政変、金玉均遭難事件等を清の日本への侮辱とし、特に金氏の事件については清国内地に起った事件で加害者を処罰するのは当然であり、金氏は日本に寄留していた「客子」で日本人とみてよいのだから「本邦に対しても礼儀を守りて然るべきに」少しも顧る所なく、兇漢の洪を厚遇して軍艦で金氏の死体と共に朝鮮に護送したこと、李鴻章が朝鮮に対しその死を祝したことなどは、すべて「本邦に対する間接の無礼にして暗に本邦を侮辱」したものだとして述べ、「屢々暴慢亡状の行」に出るのは全て日本に「戦を挑む」ものである。日本は東洋の平和を重んじ清の「改悛」を待ったが改めないで、ついに東学党の変乱により戦争となったと論じた。清に度重なる侮辱をされ戦争に至ったのだという主張の中で、その死は日清開戦の動機に利用されていた。そして、そうしたストーリーは疑問なく人々に浸透していた。

ここで、諸新聞で議論の前提とされていたことについて、考えていきたい。

第1に、金氏の反清感情が強調されていたがそれは事実だったのかということである。『報知』3月30日「兇行の原因如何」では、「金氏は常に清国の朝鮮を属邦視して専横至らざるなきを憤慨し我が日本の文化を慕ふて宿寐其の君国の前途を憂ひ居たり」と述べ、また事件は清国の陰謀ではないかという疑惑も記していた。それなら何故上海に行ったのか。他方『万朝報』4月1日「(続)金玉均の人と為り」では、「彼れが此度日清韓三国和睦の時来りしと見、自ら三和と号し、急行して上海に向ひしが如きは又其の必ずしも無膽無腸なる軽薄才子に非ざるを知る可し」と述べ、「殊に東洋の時事」を忘れてはいなかったこと、その発言は「着実なる政論家の言としか聞えざりき」と証言していた。これによれば、金氏は日清韓の和睦を願って行動したことになる。少なくとも事件直前の行動は、反清感情だけでは説明がつかない。

第2に、志成らねば日本に客死すると願っていたという話についてである。前掲「(続)金玉均の人と為り」では、かつて彼の心中を確かめようとした記者が「君は孰れの地に骨を埋むる所存あるやと問ひたるに彼れは隠し得ぬ感慨を其の能動く眉宇の間に極微に現せし様なりしも」「其現象は早や消えて『サァ暈の上で死ねば好い者だが』と滑脱して後は笑ひに紛らせたり」と記し、亡命中の「境遇の奴隷と為らず境遇に圧殺されぬ丈の気骨は有りたり」と述べていた。

また『報知』の3月31日「金氏曾て吉田清成氏を罵倒す」では、周知のように、金氏が「余不肖と雖も聊か自ら任ずるに国士を以てす」と述べ、帰化を勧めた吉田に対し「今にして日本に帰化する若き有らば孰れか故国の頽廢を起し孰れか頑老の懶夢を破り以て一新独立国を我東洋に興す者ぞ」と拒否していた。

金氏には、あくまで朝鮮国士としての自負があったことは明らかだ。常に刺客に狙われ死の危険にさらされていた金氏にとっては、「暈の上で」とはどここの地でもまともに死ねたらよいがという程の意味であろう。日本に骨を埋めてほしいなどといった話は出てこない。

第3に、日本による朝鮮改革は金氏の遺志といってよいのかという点である。例えば、『少年園』1895年1月18日「金玉均氏を憶ふ」は開戦への道を振り返り、金玉均は死してその死体を惨刑に処せられたが「今日朝鮮の革新して、金氏の宿志に達し、朴徐諸同志志を行ふ」に

至ったのは金氏の死が「導火」となった。それがなければ「日清の衝突今日の如き」には至らなかった、金氏の死が功あつてのことだと論じていた。『少年世界』1895年3月15日「英武蒙求」でも、「玉均は志を成さすといへども。死してのち成れり」と述べていた。こうした主張が、繰り返し論じられていた。しかし、これらは本人の意思を無視した単なる憶測ではなからうか。武力を背景に断行された日本による朝鮮改革は、本当に金氏の宿志といえるのか。日清の衝突を望んでいたのか。そう断言してよいのか。この点に関し、朝鮮の内政改革の内容は甲申政変時と同様のもので「広範な人民の要求とも合致する」、金氏の「志を継ぐものになっていた」ともいわれている（琴前掲書、912～913頁）。そうであれば、福沢らの内政改革推進の論理を否定はできない。果してそれでよいのか疑問が残る。

ともあれ、以上のように、「友人」らの運動や当時の主張の前提は確かな根拠に乏しく、事実の曲解に近いものもある。その点に関連して、『日日』4月15日「内外本末」の主張が興味深い。同紙は金氏は「一浮浪の外人」であり、「悲劇的生涯」と「歴史的人物」であることが日本の「朋友」を周辺に呼集したが、「其心術に至ては未だ一邦人の能く之を知るものあらず」と指摘し、「敵地とも視るべき上海に赴く」のに日本政府にも担保を求めず、なぜ上海に行くのか「毫も邦人の知友に知らしめんとせざりしなり」、「彼れが念々本邦と邦人との眷々たりしや否やは甚だ疑はしきものあり」と論じた。金氏友人ら、とくに対外硬派への批判が意図されているのだろうが、日本人が金氏の内面をどれだけ理解していたのかという点でいえば、否定しがたい指摘とも思われる。

6. 失策の挽回

『朝日』4月5日「鷄林一枝の感」は、朝鮮問題が日本の政治動向の根幹に位置するといつてよいほどに重要性を持つことを、次のように指摘していた。

「朝鮮問題は我国に採りては実に重大なる関係を有するものにして、維新以降の政治社会の現象は主に此問題に淵源し来りしことは余輩の已に屢々陳述せしところなり。即ち我国に於て与論政治の端を開きしも亦夫の征韓論の爲めに内閣の分裂を来せしに起因し、明治九年及び十年の戦乱の如きも亦同一因に外ならず。其以後に於ても亦内治上に波瀾を生ずる毎に朝鮮問題の其間に隠見せし場合少きにあらずして、今日に在っても現に如何な伏線的策略の存在しつつあるや殆んど知るべからざるものあらんとするなり」

「内治上に大影響を及ぼす」のみならず「外交上」から見れば「朝鮮問題は実に東洋全体の安危否世界の安危」にも関わる。だから「今回金氏の遭難が余輩の感情を動かすも」「偶然」ではない。畢竟、「朝鮮問題」は「屢々我内治を攪乱」するのみならず「外交上に於て至大の関係」があるのだから「平生に於て確乎不拔の政策なかるべからず」、しかし政府は何ら有効な政策を示さないという批判であった。

そうした点からも、甲申政変の失敗は対朝鮮政策の大きなダメージと認識されており、その後の日本政府の姿勢は弱腰だと憂慮されていた。『時事』5月3日「一定の方針なし」^⑭は、「朝鮮に対する政略」は「一定の方針」がなく「国の利益上に又名誉上に不利を蒙りたること幾何

なるや知る可らず」と述べ、甲申政変失敗を機に「朝鮮に於ける我勢力の消長如何を察するときには苟も日本人にして多少の感慨なきを得ざる可し」と論じ、「常に朝鮮政略を一定するの必要」を説いた。そして、その「政略」とは、「国利を保護する」ため予め方針を定めておくべきもので、「決して征韓云々の如き過激の事を演ぜんとするの意味に非ず」と強調した。さらに、朝鮮は「亡国の有様」と言ってもよく、「有力なる他国の手に帰するが如きこと」でもあれば「由々しき大事」、この上ない「立国上の不利」である。「朝鮮の位置」は「我立国の利害」に密接に関係しているが、「年来の事実」に徴して甚だ不安心に堪えざるものなり」と訴えた¹²⁾。「立国の実利害」をめぐっては、これまでも各紙で様々な観点から繰り返し論じられていた¹³⁾。朝野を問わず、見解はおおむね一致していたといえよう。

そうした議論の中、さらに事態は変転し、朝鮮で甲午農民戦争が起こり、諸新聞はこぞって出兵による鎮圧を主張した¹⁴⁾。対朝鮮政略の確立実行に絶好の機会とみたのである。

例えば、『国民新聞』の5月31日社説「兵を朝鮮に出すべし」では、この事態を「東洋問題の解釈を下だすべき一大事実」だとし、朝鮮の内乱は単なる百姓一揆ではなく革命となる可能性もあるとし、さらに「洋倭を攘ふ」という政綱に注目して、日本の勢力を朝鮮に扶植し「東洋権力の平均を維持」する際に「一大妨害物」となるだろうと論じた。日本は清に先んじて迅速に出兵し、「一は朝鮮を内乱より救ひ、一は恩を朝鮮政府に示す」べきである。まずは居留民保護を名目として内乱鎮定に十分な出兵をし、形勢によって「臨機の進退を為すの権力を附与」すればよい。甲申政変では竹添公使が失敗し、「千古の醜辱」を内外に広め朝鮮人に日本を軽侮させる結果となったが、今回は十分の機具、兵数をそろえ「声明才略の将士」を派遣しなければならぬと強調した。甲申政変の二の舞は絶対に許されないことであった。

居留民保護を名目に出兵した日本は、東学農民軍と朝鮮政府との和議の後も駐留を続け、朝鮮の内政改革を要求した。この内政改革をめぐって、『時事』は甲申政変以来の日本政府の失策が改革実行の障害となっていると厳しく非難した。と同時に、甲申政変を援助しながら失敗後は一転して金氏を冷遇し、腐敗した朝鮮政府の支持にまわったとして、十年來の日本の姿勢も強く批判していた。『時事』にとって、日本の主導する朝鮮の内政改革は甲申政変以来の失策を挽回し、退讓していた政略を転換し、あるべき朝鮮政略実行の機会であった。

●「明治十七年京城の乱」



図7 『時事新報』 1894年6月17日



図8 『時事新報』 1894年6月23日

同紙では図7・8・9のように甲申政変時の朝鮮人や清兵による日本人への暴行の図がたびたび掲載されていた。



図9 『時事新報』1894年6月19日

7月13日の『時事』社説「朝鮮の改革掛念す可きものあり」^⑭では、「文明の経営」など考えたこともない輩を相手に「改革の事を談ずるも畢竟無益の労のみ」と述べ、しかし朝鮮人からみれば「日本の挙動は変化常なくして容易に頼む可らず」、「一旦其後援を失ふときは金玉均、朴泳孝の覆轍に陥りて一身を危ふするに過ぎず、軽卒に進退す可らずとて自から差控ゆるの事情もある可し」、もっともだと論じた。こうした過去の経緯から、「今に至りて日本人が如何に熱心するも、彼の国人にして真実これに同意するものなきときは、改革の目的を達すること容易ならざる可し」。日本政府が「年来朝鮮の事を度外に置き彼の国人をして我を信ぜざるに至らしめたる」ことこそが「第一の失策」であると、忸怩たる思いを滲ませた。改革の困難とその根本的原因である日本への不信を作りだした、日本政府への非難であった。

また、『時事』7月21日の「改革論果して拒絶せられたり」^⑭では、甲申政変は「日新文明の主義に従ひ閔族専権守旧頑陋の腐敗政を一新し朝鮮国の自立を全ふするの目的」であり、「日本に依頼して種々に応援を求め」日本公使館の方でもそれに応じ助けたが、清の介入で失敗すると「日本政府の方針は俄然一変」して亡命した彼等を「酷遇」し、「隣国の改革は全く絶念」したのみか「彼の腐敗政の流行を奨励するに勉めた」も同然だった。それが今回は、金氏等の企図と同様「日新文明の流儀」に従う改革方案を示したのだから、朝鮮人としては「日本の要求を容れて真実改革を行ふの心はある可らず」、体面をつくろうため改革委員を置いたが「本音を現はして」拒絶しても今更驚くことではない。「十年來の失策を一朝に回復せんとするには何れ非常の決断を要することとなる可し」と迫った^⑮。

さらに『時事』は10月16日「井上伯の渡韓を送る」^⑭でも同様の主張を繰り返し、「金玉均朴泳孝の徒が身を抽んで国事の改革を企てたるは日本政府の力を後楯と頼みたることにして当時我政府の政略も亦その改革の成功を企望するに在りしや疑ふ可らず」。しかし計画が失敗

すると「政府は朝鮮の事を抛擲して恰も忘れたるが如く全く支那の干渉に一任して更に顧みだもせず」,「卑屈なる彼国人の眼前に日本は頼むに足らずとの実例を示していよいよ事大の一方に傾き容易に救ふ可らざるの極に陥らしめたるは我輩の殊に遺憾に思ふ所なり」と難じた。そして、今回の改革の「困難の最大原因」として、「彼の政府の当局者が兎角日本人を信ぜざるのみか一種の感情を懷て寧ろ我を嫌い表面には従順を装ひながら内実は他に志を存し」ていることを指摘し、こうなれば「理を以て論し形を以て示すも尚ほ悟らざるものは力を持って実効を促すの外に手段ある可らず」と述べ、ここでも「力」を背景とした改革断行が主張されていた。

これらの社説からは、『時事』即ち福沢らが甲申政変の失敗、及びその後の清の勢力拡大を許した政府の姿勢に如何に深い悔恨を抱いていたかは明らかである¹⁶⁾。同時に、それは改革遂行を阻む反日感情の根深さや信頼できる改革実行の担い手が見いだせない苛立ちともなり、さらに金玉均や朴泳孝への高い評価となって表れていた。

例えば、『時事』11月3日「朝鮮国の革新甚だ疑ふ可し」^⑭では、金玉均・朴泳孝・徐光範ソグアンボムらは「朝鮮国に於て始めて自主独立の大義を主唱し文明開化の新主義を論じ身を犠牲にして国に奉じたる」稀有の人物だと述べ、「此一類は多年異国に流偶して普く酸甘を嘗め政治上の知見も甚だ博くして経綸の伎倆に乏しからず」,「一国の政府の党路者」として充分その任に堪えられると絶賛した。さらに、「好都合」として、次のように論じていた。

「今度の改革は日本より進められて一に日本に依頼することにして其日本は多年金朴の一類を国に容れて日本国人も亦この人々の不幸を憐み同情相親むの朋友も甚だ少なからず。凡そ日本国中にて金朴徐の名を知らざる者なく又随て之を重んぜざる者なく恰も朝鮮人にして日本人同様の境遇に居る者なれば此種の人物が彼の政府に主座を占るは日本国の為め屈強なる東道の主人にして両国の交際上に無限の便利ある可きは固より論を俟たず（傍点筆者）」

つまり、朝鮮政府の中樞に彼等のような「親日派」がいることは、改革推進や両国関係にとって極めて「便利」だというのである¹⁷⁾。同紙11月11日「朝鮮の改革」^⑭では、彼等以外の政治家や大院君を利用籠絡しようとするのは危険だと主張し、文明の何たるかをわかっていない者らを相手に「国事の改革を謀る」のは「殆んど絶望の次第」である。だが、金らは違うとして、「毎度この一類を入るの利を説く所以」を、次のように述べていた。

「独り金玉均朴泳孝徐光範の一類は其人物如何に拘はらず多年来彼等の履歴上よりして日本国人には背く可らず他国人には依る可らざるの身分なるが故に其身分を抵当にして之に信用を置き先づ此輩と共に事を與にして仮令ひ直に彼等に政権を授けざるも之を近親して共に他の人物を鑑識して稍安全にして大なる過を免かる可し。」

これらの発言を、どう考えるべきなのだろうか。福沢は朝鮮人留学生を積極的に受け入れ教導し、特に金氏への親身な援助は高く評価されている¹⁸⁾。その点でいえば、7月21日の「改革論果して拒絶せられたり」^⑭で、「金玉均の身は轆轤落魄、寄るに処なく語るに友なく絶望の余り自から危険と知りつつ上海行の險を冒し遂に兇人の毒手に罹りて其身を失ふに至れり」と述べ、危険を承知で敢えて上海に行かざるを得なかったその心中を察していたことが注目され

る。福沢には、金氏が絶望的な孤独にあったことも、よくわかっていたのだろう。「国の為に身命を抛って腐敗政の改革を企てたるは自からはれ公明正大、男子の事」(同前)との弁は、幕末維新期を潜り抜けた明治の啓蒙家としての自分自身に重ねての思いにも見える。こうした金氏への共感には、旧民権派にも共通するものがある。他方、「友人会」のメンバーには、あからさまに朝鮮侵略を主張したり差別的な発言をする者が目立っていた¹⁹⁾。それに比べれば、福沢ははるかに良き理解者であった。

しかし、改革の難航をめぐって書かれた先の論説にも、十分な留意が必要である。彼等「この一類」は日本と深い関係をもつが故に日本の要求に拒否はできない、そこに「信用」を置いて事を運べば「安全」だろうといった発言は、個人的な親交からというよりも国家的観点から「親日派」を見定める発想である。「この一類」が朝鮮政府のトップにいることは日本にとって極めて「好都合」、日本の国益にとって利用価値の高い「便利」な存在だという見解が、ここに吐露されていた。

状況的判断からの発言は、時が経てば真意も明らかになる。「義侠」の主張もそうなのだろう。『時事』8月10日の社説「改革の結果は多数の幸福なる可し」¹⁹⁾では、日本のやっている「事の本体は公明正大、一点の私あるに非ず、真実隣国の為めに義侠の志を致すに外なら」ないと主張していた。しかし、翌年1895年3月12日の社説はその名も「義侠に非ず自利の為めなり」²⁰⁾であった。日本の商売上の利益のための助力に対し報酬を取得するのは当然であると主張し、将来「非常なる好市場」となり、世界の貿易に利する所大であると論じていた。

おわりに

以上のように、本稿では金氏暗殺事件をめぐり諸新聞がどのように報道していたのか、日清戦争期の言論状況を検証してきた。まず、1では「友人会」が主導した遺骸引取り埋葬運動とその主張、2では朝鮮政府と清の動向が日本の国権への侮辱であるという激しい非難について、3では容易に氷解しがたい朝鮮の反日感情への解決策として要求された「力」の行使実行を、4では遺骸極刑を野蛮の証明とし日本が文明化に導くことが必要だとした主張について、さらに5では金氏への日本人の理解をめぐる諸問題など、6では甲申政変失敗以降の政府の失策挽回の要求や内政改革推進の主張などを確認した。

多くの新聞で、これら一連の出来事が対朝鮮、対清強硬論の根拠となり国民を戦争に動員する説得材料となって開戦が主張された。また、金氏暗殺の衝撃的なニュースを各紙は日本を敬慕する亡命者の不遇悲運として報じ、日本人の義拳を呼び掛け盛んに義侠心に訴えた。新聞雑誌の他、浄瑠璃や演劇などでも題材になり、様々な形で老若男女の心情に訴え²⁰⁾ 善意を引き出す物語となっていた。こうして庶民の同情や善意を背景に日清戦争が断行された。義は我に在りという主張が清への敵愾心を煽り、開戦を国民に受け入れさせていくのに力を発揮し、戦意高揚が図られた。

亡命十年の間には、同情の声だけではなく国外追放を求めたり、ロシアや清との接触をスパイと騒がれたこともあった²¹⁾。だが死して一転、「不遇悲運の士」という評価のみとなり、親

日派としての経歴が喧伝された。各紙では、金氏は日本の感化を受け日本を敬愛していた志士であり日本人として扱うべきであるとか日本に帰化したも同然であるという主張が当然のように述べられ、腐敗政治の横行、懦弱な風俗、絶えず生じる民乱など朝鮮の現状は亡国に等しいと論じ、しかし自ら改革の力は無いので隣国のために助力するのが善隣の道、文明の先進国日本の天職であり、国政改革を願った金氏の宿願成就でもあるということが繰り返し論じられていた。金氏の朝鮮革命家としての自負心や朝鮮人の民族的誇り、主体性を無視した見解がほとんどであった。

以上のように、金氏暗殺事件をめぐる言論状況は、その悲劇性とともな義侠心に訴え、仇討の意味も持たせながら朝鮮政府や清の日本に対する無礼や侮辱を強調して対朝鮮・対清強硬論を展開しつつ開戦を主張していくという論旨で大きく一致していた。庶民の素朴な義侠心や同情を集め、それに混在して「同情」という名の下に朝鮮蔑視や併合が主張されていたのだが、その結果引き起こされたこの戦争の侵略性について問うたものはほとんどなかった。こうした「善意」や「義侠」の意義は全く疑われることのないまま、併合へと行きついたともいえるのではなかろうか²²⁾。このような道徳的言辭が説得力を得て他国への侵略が様々な形で推し進められた実態については、今後も検討していきたい。

また先述のように、内政改革をめぐるはまだ考えるべき問題が残されていると思われる。改革の内容に一致する点はあるが、金氏らの意向と福沢や日本政府の思惑などがからみあいながら進行した事態は単純とは思えない。金氏ら「親日派」の評価にもかかわるが、日本の推進した併合とその過程をどう捉えるのか、これについても今後の課題である。

注

- 1) 金氏と日清戦争をめぐる新聞論調に関する先行研究には、滯日中の金玉均を研究した琴秉洞『金玉均と日本』（緑陰書房、1991年、850～871頁）、山田昭次「日清戦争期の朝鮮問題と天皇制」（『植民地支配・戦争・戦後の責任』八月書館、2005年）などがある。また金氏をはじめ開化派については多くの研究があり、金氏の政治的構想における大国志向からの脱却、朝鮮中立化構想なども指摘されている（趙景達「金玉均から申采浩へ―朝鮮における国家主義の形成と転回」（『講座世界史』第7巻、東京大学出版、1996年、所収）など参照）。なお、本稿では当時の表記にそえ略称は「金氏」とした。
- 2) 「金玉均の人と為り（社員愛隣子）」『万朝報』3月31日。
- 3) 「（続）金玉均の人と為り」『万朝報』4月1日。
- 4) 「金玉均氏暗殺せらる」『郵便報知』3月30日。
- 5) 「同胞兄弟の義侠心に訴ふ」『郵便報知』3月31日。
- 6) 例えば、4月21日『万朝報』「金氏の追吊会」では岐阜県池田郡の有志による「故金玉均氏の追吊会」では参加者は四百余名に及び「有志者は金三円を醸集し朴泳孝氏の」親隣義塾に金円を寄付したという。また同紙6月14日「金氏の法会」では「神戸の侠客熊野卯蔵が発起となり」金氏の「法会を行ひ」「頗る盛会」だったという記事などがある。
- 7) 大阪事件については、大阪事件研究会編著『大阪事件の研究』（柏書房、1982年）、山田昭次「甲申政変期の日本の思想状況―」（山田他編『幕藩制から近代へ』柏書房、1979年、所収）、吉野誠「大阪事件における朝鮮」（『東海大学紀要・文学部』48輯、1988年）他多数あり、アジアへの連

帯の主張とその侵略性が検討され、大国意識、文明国意識にもとづく問題性が指摘されている。

- 8) 例えば『朝日』の4月28日社説「朝鮮処分」は、政府の「事なかれ」主義を批判し、全面的に『時事』同社説の支持を表明した。「時事翁は曾て金玉均に深き縁故を有せし所のものありしが為め特に今回の朝鮮処分に強硬の議論を主張するならんと」いうものもあるが「今回の事其大体に於ては固より時事翁の論ずるが如く実に一大英断を以て之を処分せざるべからず。是乃ち長く両国の平和を保つ所の道なり。姑息の策を以て一時の平和を彌縫せんとするは却て他日の大患を今日に培養するものといふべし」。また『国民之友』（5月3日）は「生平、現在の秩序を保つの外なき時事新報すらも、断じて韓廷に対して、強硬なる談判を試むべきを説く。以て世運の変を觀るべき也」と論じていた。政治的には異なる立場であった『時事』と対外硬派（『朝日』『国民之友』等）は、朝鮮政略では極めて近い見解にあった。また、同社説は福沢の全集には収録されていないが、同時代人は『時事』の論説を福沢の見解として当然のように受けとめていたことも注目される点である。
- 9) 例えば7月27日「我に挟む所なし」では「心事は公明正大、一点の私あることなし」と主張し、7月29日「日清の文明は文野の戦争なり」では「世界文明の進歩を目的として」反対し妨害するものを「打倒」したまでだと述べ、9月29日「朝鮮の独立」でも、「政治上の野心」はなく国土の併呑や「保護国」にするようなことはない。「未開を開き恰も一区の新開国を得て貿易の市場に供するに至るときは対岸の隣国なる日本の利益は此上もなく我能事終ると云ふ可し」、他の文明国が朝鮮の改良進歩を図っても日本の関与するところではないと述べ、世界の利益であると強調していた。これらの発言は、欧米等国際社会への弁明、国際世論への配慮からであったともいえるよう。
- 10) 文明という至上課題とともに征韓論との違いが強調されていた。例えば『万朝報』6月21日「文禄の役と我兵の入韓」では秀吉の朝鮮出兵と出兵の目的は異なるが「帝国の威武を海外に宣揚するは即ち一なり」と論じたり、同紙7月29日「一将の大気餓」では某軍人の談として「朝鮮を取るも益なし」、朝鮮人は神功皇后や秀吉の朝鮮出兵以来日本人を「倭奴」として教育されており、「一般人民は清兵を目して天兵降下と称し」「清を尊び日本を卑み」「到底服す可らず」、「幼児のみ残して韓民を鑿殺するに在り」と民族的抹殺までが主張されていた。全く論外の主張だが、『時事』はこうした主張が欧米の批判や干渉の口実になることを懸念して、征韓論との違いを強調しつつ野心なき文明化の意義を内外に訴えたのだと思われる。
- 11) 崔書勉「金玉均・上海最後のメモ」『アジア公論』1978年6月、223頁。
- 12) 朝鮮政策の確定の要求とともに、清との連携や協調の一切をも否定し、清を利用した他の強国の勢力伸張阻止などの政略を批判した。同紙5月4日「他を頼みにして自から安心す可らず」⑭も同趣旨である。
- 13) この事件の3年前の第一議會直後の朝鮮問題をめぐる思想状況については拙著『中江兆民の国家構想』（明石書店、2008年、111～123頁）参照。また、兆民も「友人会」の一員であった。
- 14) 例えば『時事』5月30日「朝鮮東学党の騒動に就いて」⑭、6月5日「速に出兵す可し」⑭、6月6日「計画の密ならんよりも着手の迅速を願う」⑭。『報知』6月1日「朝鮮の内乱を軽視する勿れ」。『日日』6月6日「朝鮮の兵乱」「朝鮮派兵に付て」。『万朝報』6月13日「士気を振起せよ」など枚挙にいとまない。
- 15) これに関連して、同紙7月15日「朝鮮改革の手段」⑭では武力を背景に迅速な近代化を図るよう主張した。
- 16) この時期の『時事』の主張には甲申政変以前の主張との連続性がみられ、その観点から分析する必要があると考えている。この点については、すでに坂野潤治により「脱亜論」以前の朝鮮改造

論を唱えていたときの方が「脱亜論」以後よりもはるかに侵略的であったと指摘されている（『明治・思想の実像』創文社、1977年、54～56頁）。また、米谷匡史は「脱亜論」というより「甲申政変以前の路線の延長上にあるものととらえるべき」だとし、さらに「朝鮮の独立と改革を支援する形で、積極的に関与していこうとする」福沢の思想に「文明」の名によるアジア介入という「近代」の暴力」を指摘し、そこに批判の照準を定めるべきと論じている（『アジア／日本』岩波書店、2006年、54～55頁）。

- 17) 同紙8月7日「教育の改良最も肝要なり」⑭では親日派養成の重要性も論じられている。
 - 18) 例えば、杵淵信雄『福沢諭吉と朝鮮』（彩流社、1997年、47～50頁）。
 - 19) 山田前掲書では演説会や新聞記事を検証した結果、金氏を朝鮮中国に対する排外主義煽動の材料に使い「同情」とは言えないこと、朝鮮の従属化や併合を説き政府の対アジア強硬政策を煽り「死せる朝鮮人金玉均にたいする民族的侮辱」だと指摘されている。
 - 20) 例えば谷崎潤一郎は幼い頃の強烈な印象を次のように語っている。「私は妙に此の金玉均の事件を記憶にとどめてゐる」が「それは戦争の前駆として新聞に大きく扱はれ、世間が頻りに取り沙汰をしたからでもあろう。たしかその年の秋、団子坂の菊人形でも、金玉均暗殺の場面が人形になって飾られてゐたのを見たことがあった」（琴前掲書、870頁より再引）。
 - 21) 併合後のことだが、ロシアとの疑惑から他日日本人に殺されたかもしれない、暗殺は金氏本人のためにも日本のためにもよかったという談さえあった（民友社版『金玉均』、1916年、琴前掲書632～633参照）。
 - 22) こうした中で唯一の例外とも言うべきは金氏の真意を理解し韓国併合を喜ばなかった須永元であろう（琴前掲書、667頁参照）。
- 注記）引用した史料は送りがな表記などは原文のままに、濁点や句読点のみ適宜補った。また『時事』の社説について、『福沢諭吉全集』（岩波書店、1961年）に収録されている場合には収録巻を14巻＝⑭のように付記した。

Summary

The Logic Behind a Justification of the Sino-Japanese War

— An analysis of Japanese newspaper claims over the assassination of the Korean reform politician Kim Okgyun—

KOBAYASHI Mizuno

In 1884, just before the Sino-Japanese War, the Korean reform politician Kim Okgyun (金玉均) was assassinated after leaving Japanese exile for Shanghai. Ten years ago, with the support of the Japanese Government, Kim carried out political reform (The Kapsin Political change 1884), but he failed, he lived in exile in Japan, but the Japanese Government treated him coldly. Ten years later, he was assassinated by a Korean. Following this incident, anti-Korea and, anti-China sentiment arose and was a cause of the Sino-Japanese War.

In this report, I analyze contemporary newspaper articles dealing with this case and inspected how these provided a logical basis for influencing public opinion to support war. In addition, I considered the fact of “the friendship” between the Japanese and Kim, particularly with regard to the role of FUKUZAWA Yukichi.

The news of the assassination appealed to the Japanese chivalrous spirit and the criticized the cowardice of the government. It fanned hostility toward China and persuaded the nation that the coming war was a holy war. The reports ignored Kim’s national pride as a Korean. Many newspapers demanded secure the profit for the independence of Korea. Japan-Korean annexation were insisted on in the name of “friendship”. It was insisted that the invasion of Korea was for the sake of civilization. It was not considered to be a problem that this war was one of aggression.

Keyword: The First Sino-Japanese War, Kim Okgyun (the Korean reform politician, independent faction, “pro-Japanese”), The Kapsin Political Coup (change), FUKUZAWA Yukichi, Nationalism

青山學院女子短期大學

紀 要

第六十四輯

平成22年12月 刊

JOURNAL
OF
AOYAMA GAKUIN
WOMEN'S JUNIOR COLLEGE

NO. 64

DECEMBER, 2010

目次

脳死・臓器移植をめぐる公共的議論と法の役割

.....河見 誠.....1

詞的情景論・(1)——「海辺の別れ」という詞場——

ミュージシャンを読むためのストラテジとしての詞作品研究の課題

.....おかざきかずお.....1

個人語彙規模の測定に関する一考察

.....高野 嘉 明.....9

EFL Wordlists: The Need for a Modern Learner Lexicon

.....Joseph Phillips.....27

女子短期大学生の環境意識

.....梅澤香代子、宮川香織、廣田道夫.....37

日清戦争開戦前夜の思想状況

——金玉均暗殺事件をめぐる一考察——

.....小林瑞乃.....45

バイオ燃料に関するアメリカの動向について

.....信澤久美子.....65

英国産業連盟と1920年代不況

——デフレーションと構造調整——

.....秋富創.....77

身体毀損の噂に見る社会の表象

.....渡辺良智.....93

先行経験が意思決定における後悔に及ぼす影響

.....武田美亜.....111

現代ロシア社会における子どもの養育をめぐる諸問題

..... 村 知 稔 123

習得の時短のための救急蘇生法トレーニング・プログラムの構造解析

..... 渡 部 かなえ 141

ピースメーカーキングとキリスト教

..... シェロ マイク 151

フォーマル・スキーマとしての5文型と英文理解

..... 黒 岩 裕 159

食事場面での母親の行動認識と、感情対処方略としての食行動が、

摂食障害傾向に及ぼす影響

..... 田 中 志 帆 169

青山学院女子短期大学研究成果一覧 187

CONTENTS

OKAZAKI Kazuo	
On the Poetical Background of Popular Song	1
 TAKANO Yoshiaki	
A Note on the Measurement of Personal Vocabulary Size	9
 Joseph Phillips	
EFL Wordlists: The Need for a Modern Learner Lexicon	27
 UMEZAWA Kayoko, MIYAGAWA Kaori, HIROTA Michio	
Study of Ecological Awareness of Women's Junior College Students	37
 KOBAYASHI Mizuno	
The Logic Behind a Justification of the Sino-Japanese War	
—An analysis of Japanese newspaper claims over the assassination of the Korean	
reform politician Kim Okgyun—	45
 NOBUSAWA Kumiko	
Biofuel Problems in the U.S.	65
 AKITOMI Hajime	
The Federation of British Industries and the Depression in the 1920s:	
—Deflation and Structural Adjustment—	77
 WATANABE Yoshitomo	
Images of Society Seen through Body-parts Rumors	93
 TAKEDA Mia	
The Effects of Prior Experience on Regret in Decision-Making	111

MURACHI Toshimi	
The Problems Surrounding the Upbringing of Infants and Children in Contemporary Russia	123
WATANABE Kanae	
An Efficient Program for Basic Life Support Training Designed to Shorten the Time for Mastery	141
Mike Sherrill	
Peacemaking and Christianity	151
KUROIWA Yutaka	
Reading Comprehension and Five Sentence Patterns as a Formal Schema	159
TANAKA Shiho	
The Influences of Mother-Child Mealtime Interaction during Childhood, and Emotional Eating on Eating Problems among under Graduate Women	169
~~~~~	
KAWAMI Makoto	
Public Discourse on Brain Death and Organ Transplantation: the Role of Law .....	1

編集委員

宮田雅智 中井章子

藤本勝義 大野芳材

池田孝一 浅見均

石井孝彦

執筆者（五十音順）

秋富 創 准教授

岡崎和夫 教授

河見 誠 教授

黒岩 裕 准教授

小林瑞乃 専任講師

シエロマイク 准教授

高野嘉明 教授

武田美亜 専任講師

田中志帆 准教授

信澤久美子 准教授

※廣田道夫 教授

Phillips, Joseph 准教授

村知稔三 教授

渡部かなえ 教授

渡辺良智 教授

※梅澤香代子（本学非常勤講師）

※宮川香織（本学家政学科副手）

※印は共同執筆者

平成二十二年十二月十日発行

青山学院女子  
短期大学紀要 第六十四輯

編集  
発行

青山学院女子短期大学  
東京都渋谷区渋谷四ノ四ノ二五

印刷 丸善株式会社